「どうか察しておやンなすつて。おせんにして見りや、自分から文を書いたな始めての、いはば初戀とでも申しやせうか。はづかしい上にもはづかしいのが人情でげせう。道ッ端で展げたとこを、ひよいと誰かに見られた日にやア、それこそ若旦那、氣の弱いおせんは、どんなことになるか、知れたもんぢやござんせん。野暮は承知の上でござんす。どうか、こゝンところをお察しなすつて。……」

谷中から上野へ抜ける、寛永寺の土塀に沿つた一筋道、光琳の繪のやうな櫻の落葉が、道に敷かれた中に佇んだ、若旦那德太郎とおせんの兄の千吉とは、折からの夕陽を浴びて、色よい返事を認めたおせんの文を、見せろ見せないのいさかひに、しばし心を亂してゐたが、この上の爭ひは無駄と察したのであらう。やがて德太郎は細い首をすくめた。

「あたしや氣が短いから、どこへ行くにしても、とても歩いちや行かれない。千吉つあん、直ぐに駕籠を呼んでもらはうぢやないか。」

「合點でげす。」

千吉は二つ返事で領いた。

文二

德太郎と千吉とが、不忍池畔の春草亭に駕籠を停めたのは、それから間もない後だつた。

德太郎は女中の案内も待たず、驅け込むやうに千吉の手をとつて、奥の座敷へ連れ込んだ。

「さ、千吉さん。」

「へえ。」

「早くお見せ。」

「何をでござんす。」

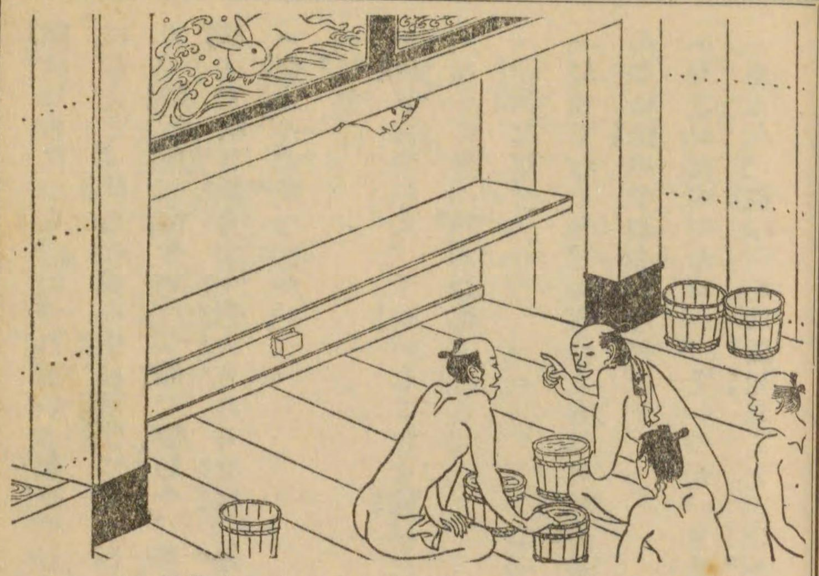
「おや、何をはあるまい。おせんのふみぢやないか。」

「お、さうだ。これはすつかり忘れて居りやした。」

「お前が道端ぢや見せられないといふから、わざ〳〵駕籠を急がせて、こゝまで來たんだよ。さ、大事な文を、少しも速く見せてもらひませう。」
「お見せいたしやす。」
「口ばつかりでなく、速くお出しッたら。」
「出しやす。——が、ちよいとお待ちなすつておくんなさい。その前に、あつしやア若旦那に、ひとつお願ひ申してえことがござんすので。……」
「何んだえ、あらたまつて。——」
「實アその、おせんの奴から。……」
「なに、おせんから、あたしに頼みとの。」
「へえ。」
「そんならなぜ、もつと早くいはないのさ。」
「申上げたいのは山々でござんすが、ちと厚かましい筋だもんでげすから、ついその、あつしの口からも、申上げにくかつたやうな譯でげして。」

「馬鹿な。つまらない遠慮なんか、水臭いぢやないか。そんな遠慮はいらないから、いつとくれ。あたしでかなふことなら、どんな願ひでも、きつと聞いてあげやうから。……」
「そりやアどうも。おせんに聞かしてやりましたら、どれ程喜ぶか知れやアしません。——ところで若旦那。」
「なにさ。」
「そのお願ひと申しますのは。」
「その頼みとは。」
「お金を。——」
「何んのことかと思つたら、お金かい。憚りながら、あたしや江戸でも人様に知られた、橘屋の德太郎、おせんの頼みとあれば、決していやとはいはないから、かまはずにいつて御覽。たとへどれ程の大金でも、あれのためなら、首は横にや振らないつもりだよ。」
「へえ〳〵、どうも恐れいりやした。いやもう、おせん、おめへよく捕つたぞ。これ程の鼠たア、まさか思つちや——」

「これ千吉つあん、何をおいひだ。あたしのことを鼠とは。……」
「ど、どういたしやして、鼠なんぞた申しやしません。若旦那にはこれからも、鼠のやうに、チウ義をおつくし申せと、かう申したのでございます。」
「お前は口が上手だから。……」
「口はからきし下手の皮、人様の前へ出たら、ろくにおしやべりも出來る男ぢやござんせんが、若旦那だけは、どうやら赤の他人とは思はれず、ついへら〳〵とお喋りもいたしやす。――ねえ若旦那。どうかおせんに、二十五兩だけ、貸してやつておくんなせえやし。」
「何、二十五兩。――」
「江戸で名代の橘屋さんの若旦那。二十五兩は、ほんのお小遣ぢやござんせんか。」
千吉はさういひながら、ふところ深くひそませた、おせんのふみを取だした。
ありがたく存じ候　かしこ　せん　より
若旦那さま
ふみのおもては、たゞこれだけだつた。



文三

朝つぱらの柳湯は、町内の若い者と、楊枝削りの御家人と、道樂者の朝歸りとが、威勢のよしあしを取ませて、榴柘口の内と外とにどくろを卷いたひと時の、辱も外聞もない、手拭一本の裸繪卷を展げてゐたが、こんな場合、誰の口からも同じやうに吐かれるのは、何吉がどこの賭場で勝つたとか、どこそこのお何が、近頃誰にのぼせてゐるとか、さもなければ芝居の噂、吉原の出來事、觀音様の茶屋女の身の上など、おそらく口を開けば、一樣におのれの物知りを、少しも速く人に聞かせたいとの自慢からであらう。玉のやうな汗を

額にためながら、いづれもいゝ氣持でしやべり續ける面白さ。中には、顔さへ洗やもう用はねえと、流しのまん中に頑張つて、四斗樽のやうな體を、あつちへ曲げ、こつちへ伸して、隣近所へ泡を飛ばす暇な隱居や、膏藥だらけの背中を見せて、弘法灸の效能を、相手構はず吹き散らす半病人もある有樣。湯屋は朝から寄合所のやうに賑やかだつた。

「長兄イ。聞いたか。」

「何を。」

「何をぢやねえ、千吉がしこたま儲けたッて話をよ。」

「うんにや。聞かねえよ。」

「迂潤だな。」

「だつておめへ、知らねえもなア仕方がねえや。——いつてえ、あの怠け者が、どこでそんなに儲けやがつたんだ。」

「どこッたつておめへ、そいつが、てえさうないかさまなんだぜ。」

「ふうん。奴にそんな器用なことが出來るのかい。」

「相手がいゝんだ。」

「椋鳥か。」

「ちやき〳〵の江戸つ子よ。」

「はアてな。江戸つ子が　奴のいかさまに引ッかゝるたアをかしいぢやねえか。」

「いかさまッたつて、おめへ、丁半ぢやねえぜ。」

「ほう、さいころぢやねえのかい。」

「女が餌だ。」

「女。——」

「相手を釣つて儲けたのよ。」

「そいつア尙更初耳だ。——その相手ッてな、どこの誰よ。」

「油町の紙問屋、橘屋の若旦那だ。」

「ほう、そいつアおもしれえ。」

「あれだ。おもしれえは氣の毒だぜ。千吉は妹のおせんを餌にして、若旦那から、二十

五兩といふ大金をせしめやがつたんだ。」
「なに、二十五兩だつて。」
「どうだ。てえしたもんだらう。」
「冗談ぢやねえ。二十五兩といやア、小判が二十五枚だぜ。こいつが二兩とか、二兩二分とかいふンなら、まだしも話の筋ア通るが、二十五兩は飛んでもねえ。あいつの首を引換にしたつて、借りられる金ぢやアねえぜ。冗談も休み休みいつてくんねえ。」
「ふん、知らねえッてもなアおッかねえや。おいらア現にたッた今、この二つの眼で、睨んで來たばつかりなんだ。山吹色で二十五枚、滅多に見られるか、さぢやアねえて。」
「ふゝゝゝ。金の字。その話をもうちつと委しく聞かせねえか。」
さういひながら、榴柘口から、にゆッと首を出したのは、繪師の春重だつた。
「春重さん、お前さんゐたのかい。」
「ゐたから顔を出したんだがの。大分話が面白さうぢやねえか。」
春重は、もう一度ニヤリと笑つた。

文四

「ふゝゝゝ、金の字、なんで急に、啞のやうに默り込んぢやつたんだ。話して聞かせねえな。どうせおめへの腹が痛む譯でもあるめえしよ。」
榴柘口から流しへ出て來た春重の樣子には、いつも通りの、妙なねばりッ氣が絡みついてゐて、傘屋の金藏の心持を、ぞッとする程暗くさせずにはおかなかつた。
「てえした面白え話でもねえからよ。」
「なに面白くねえことがあるもんか。二十五兩といやア、おいらのやうな貧乏人は、まご〳〵すると、生涯お目にやぶら下れねえ大金だぜ。そいつ

をいかさまだかさかさまだかにつるさげて、物にしたと聞いちやア、志道軒の講釋ぢやねえが、嘘にも先を聞かねえぢやゐられねえからの。――相手が橘屋の若旦那だつてえな、ほんまかい。」

「おめへさん、それを聞いてどうしようツてんだ。」

顔をしかめて、春重を見守つたのは、金藏に兄イと呼ばれた左官の長吉だつた。

「どうもしやアしねえがの。そいつがほんまなら、おいらもちつとばかり、若旦那に借りてえと思つてよ。」

「若旦那に借りるツて。」

「まづのう。だが安心しなよ。おいらの借りやうツてな、二十五兩の三十兩のといふ、大それた譯のもんぢやねえ。ほんの二分か一兩が關の山だ。それも種や仕かけで取るやうなけちなこたアしやアしねえ。眞證間違ひなしの、立派な品物を持つてつて、若旦那の喜ぶ顔を見ながら、拜借に及ばうツてんだ。」

「そいつア駄目だ。」

「なんだツて。」

「駄目だツてことよ。橘屋の若旦那は、たとへお大名から拜領の鎧兜を持つてツたつて、金ア貸しちやアくれめえよ。――あの人の欲しい物ア、日本中にたつたひとつ、笠森おせんの情より外にや、ありやアしねえツてこつた。」

「だから、そのおせんの、身から分けた物を、おいらア買つてもらひに行かうツてえのよ。」

「身から分けた物。――」

「さうだ。他の者が望んだら、百兩でも讓れる品ぢやアねえんだが、相手がおせんに首ッたけの若旦那だから、まづ一兩がとこで辛抱してやらうと思つてるんだ。」

「春重さん。またお前、つまらねえ細工物でもこしらへたんだな。」

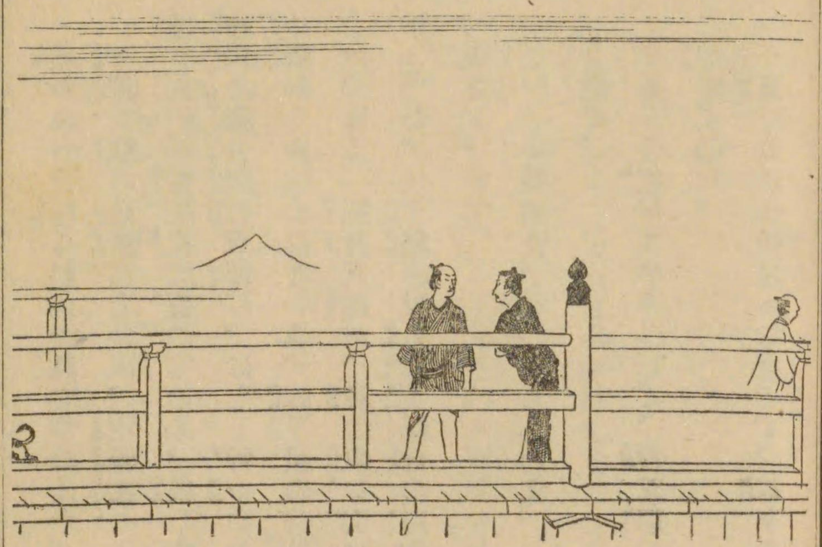
「冗談ぢやねえ、こしらへもンなんぞた、天から譯が違ふンだぜ。」

「譯が違ふツたつて、そんな物がざらにあらうはずもなからうぢやねえか。」

「ところが、あるんだから面白えや。」

「そいつアいつてえ、なんだつてんだい。」

「爪よ。」
「え。」
「爪だッてことよ。」
「爪。」
「その通りだ。おせんの身についてた、嘘偽りのねえ生爪なんだ。」
「馬、馬鹿にしちやアいけねえ。いくらおせんの物だからッて、爪なんざ、何んの役にも立ちやアしねえや。かつぐのもいゝ加減にしてくんねえ。」
「ふん、物の値打のわからねえ奴にやかなはねえの。女の身體についてるもんで、年が年中、休みなしに伸びてるもなア、髪の毛と爪だけだぜ。そのうちでも爪の方は、三日見なけりや目立つて伸びる代物だ。――指の數で三百本、糠袋にいれてざつと半分よ。この混りッ氣のねえおせんの爪が、たつた小判一枚だとなりや、若旦那が猫のやうに飛びつくなア、磨ぎたての鏡でおのが面を見るより、はつきりしてるぜ。」
春重のまはりには、いつか、ぐるりと裸の人垣が出來てゐた。



文五

「千の字。おめへ、いゝ腕ンなつたの。」
「ふゝゝ。」
「笑ひごつちやねえぜ。二十五兩たア、大束に儲けたぢやねえか。」
「どこで、そいつを聞いた。」
「壁に耳ありよ。さつき、通りがかりに飛び込んだ神田の湯屋で、傘屋の金藏とかいふ奴が、てめへのことのやうに、自慢らしく、みんなに話して聞かせてたんだ。」
「あいつ、もうそんな餘計なことを喋りやがつたかい。」

「喋つたの、喋らねえの段ぢやねえや。紙屋の若旦那をまるめ込んで――」

下總武藏の國境だといふ、兩國橋のまん中で、ぼんやり橋桁にもたれたまゝ、薄汚ない婆さんが一匹五文で賣つてゐる、放し龜の首の動きを見詰めてゐた千吉は、通りがかりの細川の厩仲間竹五郎に、ぽんと背中をたゝかれて、立て續けに聞かされたのが、柳湯で、金藏がしやべつたといふ、橘屋の一件だつた。

が、もう一度竹五郎が、鼻の頭を引ツこすつて、ニヤリと笑つたその刹那、向ふから來かゝつた、八丁堀の與力井上藤吉の用を聞いてゐる鬼七を認めた千吉は、素速く相手を眼で制した。

「叱ツ。いけねえ。行つちめへねえ。」

「合點だ。」

するりと拔けるやうにして、竹五郎が行つてしまふと、はやくも鬼七は、千吉の眼の前に迫つてゐた。

「千吉。おめへ、こんなとこで、何をうろ〳〵してるんだ。」

「へえ。けふは親父の、墓詣りにめへりやした、その歸りがけでござんして。……」

「墓詣り。」

「へえ。」

「いつツから、そんな心がけになつたんだ。」

「どうか御勘辨を。」

「勘辨はいゝが、――丁度いゝ所でおめえに遭つた。ちつとばかり訊きてえことがあるから、つきあつてくんねえ。」

「へえ。」

「びく〳〵するこたアありやアしねえ。こいつアこつちから賴むんだから、安心してついて來ねえ。」

鬼七と呼ばれてはゐるが、名前とはまつたく違つた、すつきりとした男前の、結ひたての髷を川風に吹かせた格好は、如何にも颯爽としてゐた。

折柄の上潮に、漫々たる秋の水をたゝへた隅田川は、眼のゆく限り、遠く筑波山の麓ま

で續くかと思はれるまでに澄渡つて、綾瀬から千住を指して溯る眞帆片帆が、點々と千鳥のやうに川幅を縫つてゐた。

その繪卷を展げた川筋の景色を、見るともなく横目で見ながら、千吉と鬼七は肩をならべて、靜かに橋の上を淺草御門の方へと歩みを運んだ。

「千吉、おめへ、おせんのとこへは出かけたらうの。」

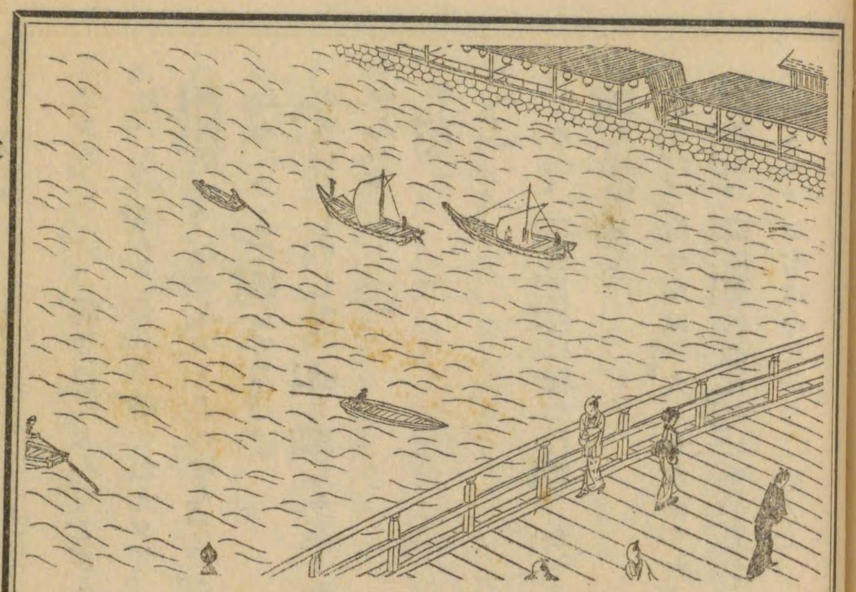
「どういたしやして。妹にや、三年この方、てんで會やアいたしません。」

「ふゝゝ。つまらねえ隱し立ては止めねえか。いまもいつた通り、おいらアおめへを、洗ひ立てるッてんぢやねえ。こつちの用で訊きてえことがあるんだ。惡いやうにやしねえから、はつきり聞かしてくんねえ。」

「どんな御用で。……」

「おせんのとこへ、菊之丞が毎晩通うッて噂を聞き込んだんだが、そいつをおめへは知つてるだらうの。」

かう訊きながら、鬼七の眼は異樣に光つた。



文六

鬼七の問は、まつたく千吉には思ひがけないことだつた。——子供の時分から好きでこそあれ、嫌ひではない菊之丞を、おせんがどれ程思ひ詰めてゐるかは、いはずと知れてゐるものゝ、今では江戸一番の女形といはれてゐる菊之丞が、自分からおせんの許へ、それも毎晩通つて來やうなぞとは、どこから出た噂であらう。岡燒半分の惡刷にしても、あんまり話が食ひ違ひ過ぎると、千吉は思はず鬼七の顏を見返した。

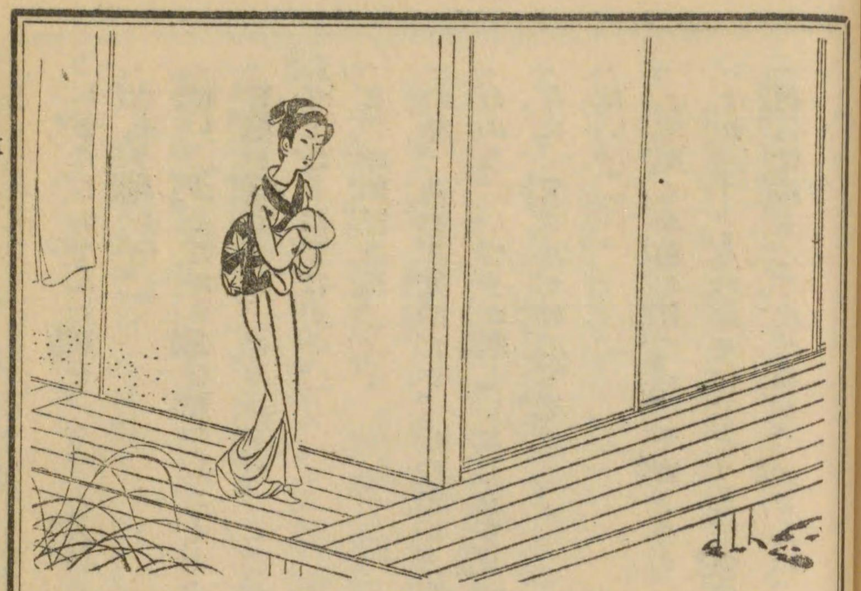
「何んでそんな、不審さうな顏をするんだ。」

「何んでと仰しやいますが、あんまり親方のお聞

きなさることが、解せねえもんでござんすから。……」
「おいらの訊くことが、解せねえッて。――何が解せねえんだ。」
「濱村屋は、おせんのとこへなんざ、命を賭けて頼んだつて、通つちやアくれませんや。」
「おめへ、まだ隠してるな。」
「どういたしやして。嘘も隠しもありやアしません。みんなほんまのことを申上げて居りやすんで。……」
「千吉。」
「へ。」
「おめへ、二三日前に行つた時、おせんが誰と話をしてえたか、そいつをいつて見ねえ。」
「話でげすッて。」
「さうだ。おせんは一人ぢやなかつたらう。たしかに相手がゐたはずだ。」
「お袋が、隣座敷にゐた外にや、これぞといつて、人らしい者アゐやアいたしません。」
「ふゝゝ。お七はゐなかつたか。」

「お七ッ。」
「どうだ、お七の衣裳を着た濱村屋が、ちやアんと一人ゐたはずだ。おめへはその眼で見たぢやねえか。」
「ありやア親方。――」
「あれもこれもありやアしねえ。おいらはそいつを訊いてるんだ。」
「人形ぢやござんせんか。」
「とぼけちやいけねえ。人間を人形と見違える程、鬼七アまだ耄碌しちやアゐねえよ。ありやア菊之丞に違えあるめえ。」
「確にさうたア申上られねえんで。……」
「おめへ、眼が上つたな。判つた。――もういゝから歸ンねえ。」
「有難うござんすが、――親方、あれがもしか濱村屋だつたら、どうなせえやすんで。…」
「どうもしやアしねえ。」
「どうもしねンなら、何も。――」

「聞きてえか。」
「どうか、お聞かせなすつておくんなせえやし。」
「濱村屋は、役者を止めざアならねえんだ。」
「何んでげすッて。」
「口が裂けてもいふぢやアねえぞ。――南御町奉行の、信濃守様の妹御のお蓮様は、濱村屋の、日本一の御贔屓なんだ。」
「ではあの、壹岐様からお出戻りの。――」
「叱ッ。餘計なこたアいつちやアならねえ。」
「へえ。」
「さ、歸ンねえ。」
「有難うござんす。」
千吉は、ふところの小判を氣にしながら、ほつとして頭を下げた。
襟に當る秋の陽は、狐色に輝いてゐた。



文七

無理やりに、手習ひッ子に筆を握らせるやうにして、たつた二行の文ではあつたが、いや應なしに書かされた、ありがたく存じ候かしこの十一文字が氣になるまゝに、一夜をまんじりともしなかつたおせんは、茶の味もいつものやうにさはやかでなく、まだ小半時も早い、明けたばかりの日差の中を駕籠に搖られながら、白壁町の春信の許を訪れたのだつた。
弟子の藤吉から、おせんが來たとの知らせを聞いた春信は、起き出たばかりで顔も洗つてゐなかつたが、とりあへず畫室へ通して、磁器の肌のや

うに澄んだおせんの顔を、ぢつと見詰めた。
「大そう早いの。」
「はい。少しばかり思ひ餘つたことがござんして、お智慧を拜借に伺ひました。」
「智慧を貸せとな。はッはッは、これは面白い。智慧はわたしよりお前の方が、多分に持合せてゐるはずだがの。」
「まア お師匠さん。」
「いや、それア冗談だが、いつたいどんなことが持上つたといひなさるんだ。」
「あのう、いつもお話しいたします兄が、ゆうべひよつこり、歸つて來たのでござんす。」
「なに、兄さんが歸つて來たと。」
「はい。」
「よく聞くお前の話では、千吉とやらいふ兄さんは、まる三年も、行方知れずになつてゐたとか。——それがまた、どうして急に。……」
「面目次第もござんせぬが、兄さんは、お寶が欲しいばつかりに、歸つて來たのだと、自

分の口からいつてゞござんす。」
「金が欲しいとの。したがまさか、お前を分限者だとは思ふまいがの。」
「兄さんは、あたしを囮にして、よその若旦那から、お金をお借り申したのでござんす。」
「ほう、何んとして借りた。」
「いやがるあたしに文を書かせ、その文を、二十五兩に、買つておもらひ申すのだと、引ッたくるやうにして、どこぞへ消えて失せましたが、そのお人は誰あらう、通油町の、橘屋の德太郎さんといふ、蟲ずが走るくらゐ、好かないお方でござんす。」
「そんなら千吉さんは、橘屋の德さんから、その金を借りて。——」
「はい。今頃はおほかた、どこぞお大名屋敷のお厩で、好きな勝負をしてゞござんせうが、文を御覽なすつた若旦那が、まッことあたしからのお願とお思ひなされて、大枚のお寶をお貸し下さいましたら、これから先あたしや若旦那から、どのやうな難題をいはれても、返す言葉がござんせぬ。——お師匠さん。何んとしたらよいものでござんせう。」
まつたく途方に暮れたのであらう。春信の顔を見あげたおせんの瞼は、露を含んだ花瓣

のやうに潤んで見えた。

「さアてのう。」

腕をこまねいて、あごを引いた春信は、暫し己が膝の上を見詰めてゐたが、やがて徐に首を振つた。

「徳さんも、人の心の讀めない程馬鹿でもなからう。どのやうな文句を書いた文か知らないが、その文一本で、まさか二十五兩の大金は出すまいよ。」

「それでも兄さんは、たゞの二字でも三字でも、あたしの書いた文さへ持つて行けば、お金は右から左とのことでござんした。」

「そりや、いつのことだの。」

「ゆうべでござんす。」

おせんがもう一度、顔をあげた時だつた。突然障子の外から、藤吉の聲が低く聞えた。

「おせんさん。大變なことが出來ましたせ。濱村屋の太夫が、急病だッてこつた。」

おせんは「はッ」と胸が詰まつて、直ぐには口が听けなかつた。

夢一

子、丑、寅、卯、辰、巳、――と、客のない上りかまちに腰をかけて、獨り十二支を順に指折り數へてゐた、假名床の亭主傳吉は、いきなり、息がつまるくらゐ荒ッぽく、拳固で背中をどやしつけられた。

「痛ッ。――だ、だれだ。」

「だれだぢやねえや、てえへんなことがおッ始まつたんだ。子丑寅もなんにもあつたもんぢやねえ。あしたッから、うちの小屋は開かねえかも知れねえせ。」

火事場の纏持のやうに、息せき切つて驅け込ん

で來たのは、同じ町内に住む市村座の木戸番長兵衛だつた。

傳吉はぎよッとして、もう一度長兵衛の顔を見直した。

「な、なにがあつたんだ。」

「なにがも、かにがもあるもんぢやねえ。まかり間違や、てえした騒ぎにならうッてんだ。おめへンとこだつて、芝居のこぼれを拾つてる家業なら、萬更かゝり合のねえこともなからう。こゝが秋刀魚の勘定でもしてやアしめえし、指なんぞ折つてる時ぢやありやアしねえぜ。」

「いつてえ、どうしたッてんだ、長さん。」

「おめへ、まだ判らねえのか。」

「聞かねえことにや、判らねえやな。」

「なんで血のめぐりが惡く出來てるんだ。——濱村屋の太夫が、舞臺で踊つてたまゝ倒れちやつたんだ。」

「何んだッて。そいつアおめへ、本當かい。」

「おれにや、嘘と坊主の頭アいへねえよ。——假にもおんなじ芝居の者が、こんなことを、ありもしねえのにいつて見ねえ。それこそ簀卷にして、隅田川のまん中へおッ放り込まれらアな。」

「長さん。」

「えゝびつくりするぢやねえか。急にそんな大きな聲なんざ、出さねえでくんねえ。」

「何をいつてるんだ。これがおめへ、こそ〳〵話にしてられるかい。おいらア誰が好きだといつて、濱村屋の太夫くれえ、好きな役者衆はねえんだよ。藝がよくつて愛嬌があつて、おまけに自慢氣なんざ、藥にしたくもねえッてお人だ。——どこが惡くッて、どう倒れたんだか、さ、そこをおいらに、委しく話して聞かしてくんねえ。」

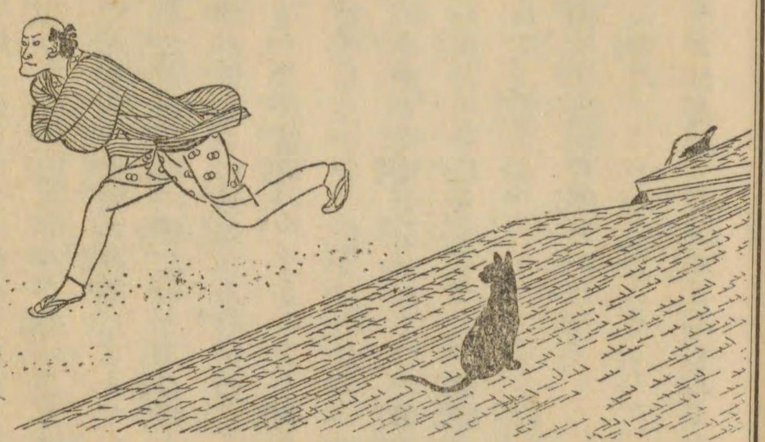
どやしつけられた、背中の痛さもけろりと忘れて、傳吉は、元結が輪から拔けて足元へ散らばつたのさへ氣付かずに、夢中で長兵衛の方へ膝をすり寄せた。

「丁度二番目の、所作事の幕に近え時分だと思ひねえ。知つての通りこの狂言は、三五郎さんの賴朝に、羽左衛門さんの梶原、それに太夫は驚娘で出るといふ、豐前さんの淨瑠璃

としつくり合つた、今度の芝居の呼び物だらうぢやねえか。はねに近くなつたつて、お客は唯の一人だつて、立たうなんて料簡の者アねえやな。舞臺ははずむ、お客はそろつて一寸でも先へ首をださうとする。いはゞ紙一重の隙もねえッてとこだつた。どうしたはずみか、太夫の踊つてた足が、躓いたやうによろ〳〵ッとしたかと思ふと、あッといふ間もなく、舞臺へまともに突ッ腑しちまつたんだ。――客席からは濱村屋ッといふ聲が、石を投げるやうに聞えて來るかとおもふと、御贔負の泣く聲、喚く聲、そいつが忽ち渦卷になつて、わッわッといつてるうちに、道具方が氣を利かして幕を引いたんだが、そりやアおめへ、こゝでおれが話をしてるやうなもんぢやアねえ、芝居中がひつくり返るやうな大騒ぎだ。――そのうちに頭取が驅け着ける、弟子達が集まるで、倒れた太夫を、驚娘の衣裝のまゝ樂屋へかつぎ込んじまつたが、まだおめへ、宗庵先生のお許しが出ねえから、太夫は樂屋に寢かしたまゝ、家へも連れて歸れねえんだ。」

「よし。お花、おいらに羽織を出してくんねえ。」

傳吉は突然かういつて立上つた。



夢二

「お前さん、どこへ行くんだよ。眞ッ晝間ッからお見世を空けて出て行つたんぢや、お客樣に申譯がないぢやないか。太夫さんとこへお見舞に行くな、日が暮れてからにしとくれよ。――ようッてば。」

下剃一人をおいて出られたのでは、家業に障ると思つたのであらう。一張羅の羽織を、澁〳〵簞笥から出して來たお花は、亭主の傳吉の袖をおさへて、無理にも引止めようと顏を窺き込んだ。

が、傳吉は、いきなり吐きだすやうにけんのみを食はせてゐた。

「馬鹿野郎、何をいつてやがるんだ。亭主のすることに、女なんぞが口を出すこたアねえから、默つて引ッ込んでろ。外のことならともかく、太夫が急病だッてのを、そのまゝにしといたんぢや、世間の奴等になんていはれると思ふんだ。假名床の傳吉の奴ア、ふだん濱村屋が好きだの蜂の頭だのと、口幅ッてえことをいつてやがるくせに、なんてざまなんだ。手間が惜しさに見舞にも行かねえしみッたれ野郎だと、それこそ口をそろへて惡くいはれるなア、加賀樣の門よりもよく判つてるぜ。——つまらねえ理窟アいはねえで、速く羽織を着せねえかい。かうなつたら一刻だつて、待てしばしはねえんだ。」

お花の手から羽織を引ッたくつた傳吉は、背筋が二寸も曲つたなりに引ッかけると、もう一度お花の手を振りもぎつて、喧嘩犬のやうに、夢中で見世を飛び出した。

「待ちねえ、傳さん。」

長兵衞は背後から聲をかけた。

「何んの用だ。」

「用ぢやアねえが、おかみさんもあゝいふンだから、晩にしたらどうだ。どうせいま行つたつて、會へるもんでもねえンだから。……」

「ふん、おめへまで、餘計なことはおいてくんねえ。おいらの足でおいらが歩いてくんだ。どこへ行かうが勝手ぢやねえか。」

「ほう、大まかに出やアがつたな。話をしたなア おれなんだぜ。行くんなら、せめておれの髯だけでも、あたッてッてくんねえ。」

「髯は歸つて來てからだ。」

「歸つて來てからぢや、間に合はねえよ。」

「間に合はなかつたら、どこいでも行つて、やつてもらつて來るがいゝやな。——えゝもう面倒臭え。四の五のいつてるうちに、日が暮れちまはア。」

前つぼの固い草履の先で砂を蹴つて、一目散に驅け出した傳吉は、提燈屋の角まで來ると、ふと立停つて小首を傾げた。

「待てよ。こいつア市村座へ行くより先に、もつと大事なところがあるぜ。——さうだ。まだおせんちやんが知らねえかもしれねえ。こんな時に人情を見せてやるのが、江戸つ子

の腹の見せどこだ。よし、ひとつ駕籠をはずんで、谷中まで突ッ走つてやらう。」

大きく頷いた傳吉は、折から通り合せた辻駕籠を呼び止めて、笠森稲荷の境内までだと、酒手をはずんで乗り込んだ。

「急いてくんねえよ。」

「ようがす。」

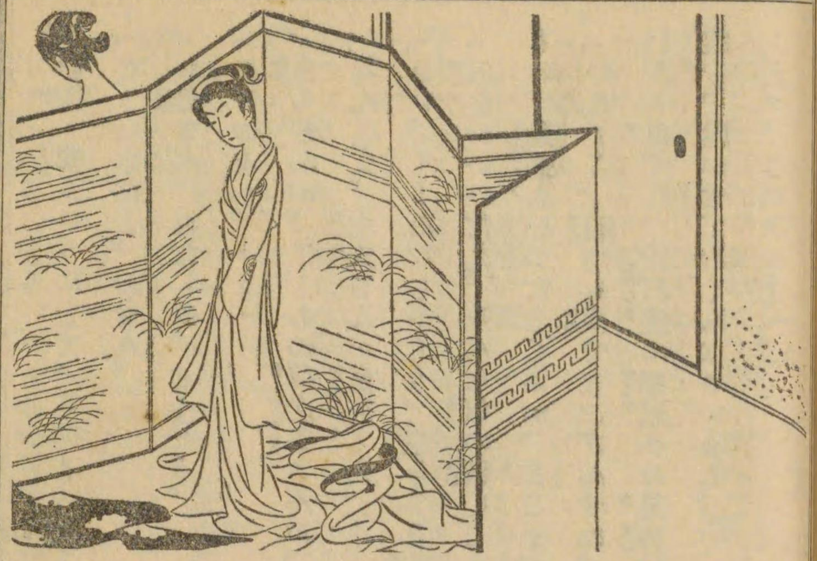
「急病人の知らせに行くんだからの。」

「合點だ。」

返事は如何にも調子がよかつたが、肝腎の駕籠は、一向突ッ走つてはくれなかつた。

「ちえッ。吉原だといやア、豪勢飛びやアがるくせに、谷中へ病人の知らせだと聞いて、馬鹿にしてやがるんだらう。傳吉アたゞの床屋ぢやねえんだぜ。當時江戸で名高え笠森おせんの、襟を剃るなア、おいらより外にや、廣い江戸中に二人たねえんだ。」

傳吉が、駕籠の中で鼻の頭を引ッこすつてのひとり啖呵も、駕籠屋には少しの利き目もないらしく、駕籠の歩みは、依然として緩やかだつた。



夢三

床屋の傳吉が、笠森の境内へ着いたその時分、春信の住居で、菊之丞の急病を聞いたおせんは、無我夢中でおのが家の敷居を跨いでゐた。

「お母さん。」

「おやおまへ、どうしたといふの。何かお見世にあつたのかい。」

今ごろ歸つて來やうとは、夢にも考へてゐなかつたお岸は、慌しく驅込んで來たおせんの姿を見ると、まづ、怪我でもしたのではないかと、穴のあく程ぢッと見詰めながら、靜かに肩へ手をかけた。が、いつもと樣子の違つたおせんは、母の

手を振り拂ふやうにして、そのまゝ疊ざはりも荒く、おのが居間へ驅け込んで行つた。

「どうおしだよ、おせん。」

「お母さん。あたしや、どうせう。」

「まアおまへ。——」

「吉ちやんが、——あの菊之丞さんが、急病との事でござんす。」

「なんとえ。太夫さんが急病とえ。——」

「あい。——あたしやもう、生きてる空がござんせぬ。」

「何をおいひだえ。そんな氣の弱いことでどうするものか。人の口は、どうにでもいへるもの。急病といつたところが、どこまで本當のことか、わかつたものではあるまいし。……」

「いえ〳〵、嘘でも夢でもござんせぬ。あたしやたしかに、この耳で聞いて來ました。これから直ぐに、市村座の樂屋へお見舞に行つて來たうござんす。お母さん、そのお七の衣裳を、脱がせておくんなさいまし。」

「えッ、これをおまへ。」

「吉ちやんが、去年の芝居が濟んだ時、默つて屆けておくんなすつたお七の衣裳、あたしに着ろとの謎でござんせう。」

「それでもこれは。——」

「お母さん。」

おせんは、部屋の隅に立てかけてある人形の傍へ、自分から歩み寄ると、いきなり帶に手をかけて、まるで芝居の衣裳着けがするやうに、如何にも無雜作に衣裳を脱がせ始めた。

「お止し。」

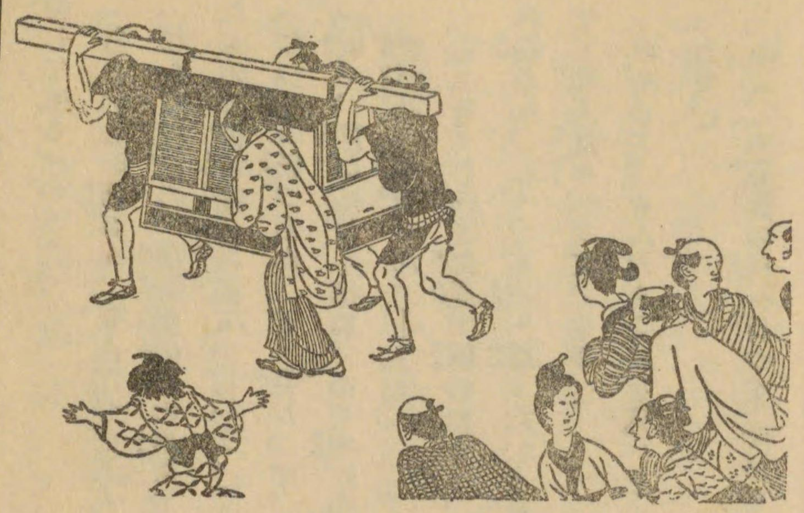
「いゝえ、もう何んにもいはないでおくんなさい。あたしやお七とおんなじ心で、太夫に會ひに行きたうござんす。」

ばらりと解いたお七の帶には、夜毎に焚きこめた伽羅の香りが悲しく籠つて、靜かに部屋の中を流れそめた。

「あゝ。——」

おせんはその帶を、ぢッと胸に抱きしめた。

「おせんや。」
お岸は優しく眼をふせた。
「あい。」
「おまへ、一人で行く氣かえ。」
「あい。」
衣裳を脱がせて、繻袢を脱がせて、屏風のかげへ這入つたおせんは、素速くおのが着物と着換へた。と、この時格子戸の外から降つて涌いたやうに、男の聲が大きく聞えた。
「おせんさん。假名床の傳吉でござんす。濱村屋の太夫さんが、急病と聞いて、何より先にお知らせしてえと、駕籠を飛してやつてめえりやした。笠森様にやおいでがねえんで、こつちへ廻つて來やした始末。ちつとも速く、葺屋町へ行つとくンなせえやし。」
「親方、その駕籠を、待たせといておくんなさい。」
「合點でげす。」
おせんの聲は、いつになく甲高かつた。



夢 四

人目を避けるために、わざと蓙卷を深く垂れた醫者駕籠に乘せて、男衆と弟子の二人だけが付添つたまゝ、菊之丞の不隨の體は、その日の午近くに、石町の住居へ運ばれて行つた。

が、たゞさへ人氣の頂點にある菊之丞が、舞臺で倒れたとの噂は、忽ち人から人へ傳へられて、今は江戸の隅々まで、知らねば、こけの骨頂とさへいはれるまでになつたのであらう。他目からは、どう見ても醫者の見舞としか想はれなかつた駕籠の周圍は、いつの間にやら五人十人の男女が、百萬遍のやうに取圍んで、追へば追ふ程、その數は

増して來るばかりだつた。

「ちよいとお前さん、何んだつてあんなお醫者の駕籠に、くツついて歩いてるのさ。」

「なんだ神田の、明神樣の石の鳥居ぢやないが、お前さんもきがなさ過ぎるよ。ありやアたゞのお醫者樣の駕籠ぢやないよ。」

「だつてお辰つあん、どう見たつて。……」

「吐ッ、靜かにおしなね。あン中にや、濱村屋の太夫さんが乘つてるんだよ。」

「濱村屋の太夫さん。——」

「さうさ。きのふ舞臺で倒れたまゝ、今が今まで、樂屋で寢てえたんぢやないか。それをお前さん、どうでも家へ歸りたいと駄々をこねて、たうとうあんな鹽梅式に、お醫者と見せて歸る途中だッてことさ。」

「おやまア、そんならそこを退いとくれよ。」

「なぜ。」

「あたしや駕籠の傍へ行つて、せめて太夫さんに、一言でもお見舞がいひたいンだから。……」

「何をいふのさ。太夫は大病人なんだよ。ちつとだッて騷いたりしちやア、體へ障らアね。一緒について行くなアいゝが、こッから先へは出ちやならないよ。」

「いゝから退いとくれッたら。」

「おや痛い。抓らなくッてもいゝぢやないか。」

「退かないからさ。」

「おや、また抓ッたね。」

髮結のお辰と、豆腐屋の娘のお龜とが、いゝのいけないのと爭つてゐるうちに、駕籠は更に多くの人數に取卷かれながら、芳町通りを左へ、おやぢ橋を渡つて、牛の歩みよりもゆるやかに進んでゐた。

菊之丞の駕籠を一町ばかり隔てゝ、あたかも葬式でも送るやうに、悵然と首を垂れたまま、一足毎に重い歩みを續けてゐたのは、市村座の座元羽左衛門をはじめ、坂東彦三郎、尾上菊五郎、嵐三五郎、それに元服したばかりの尾上松助などの一行だつた。

いづれも編笠で深く顏を隱したまゝ、眼をしばたゝくのみで、互に一言も發しなかつた

が、急に何か思ひだしたのであらう。羽左衛門は、寂しく眉をひそめた。

「松助さん。」

「はい。」

「お前さんは、折角だが、こゝから歸る方がいゝやうだの。」

「なぜでございます。」

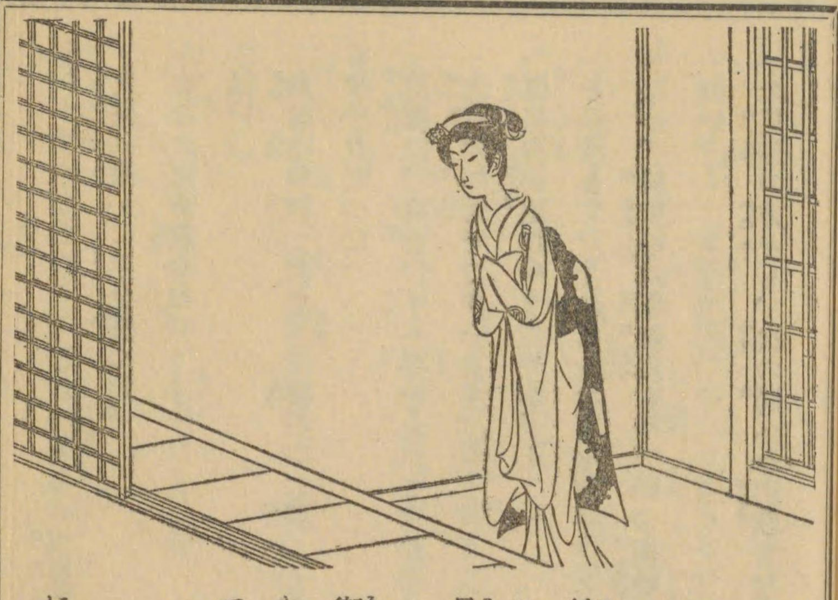
「不吉なことをいふやうだが、濱村屋さんはひよつとすると、あのまゝいけなくなるかも知れないからの。」

「えゝ滅相な。左樣なことがおますかいな。」

さういつて眼をみはつたのは、嵐三五郎だつた。

「いや、わたしとて、太夫に元のやうになつてもらひたいのは山々だが、今までの太夫の樣子では、どうも難かしからうと思はれる。緣起でもないことだが、ゆうべわたしは、上下の齒が一本殘らず、脫けてしまつた夢を見ました。情ないが、所詮太夫は助かるまい。」

羽左衛門はさういつて、寂しさうに眉をひそめた。



夢五

夢から夢を辿りながら、更に夢の世界をさ迷ひ續けてゐた菊之丞は、ふと、夏から軒場につり殘されてゐた風鈴の音に、重い眼を開けてあたりを見廻した。

醫者の玄庵をはじめ、妻のおむら、座元の羽左衛門、菊五郎、彦三郎、その他の人達が、ぐるりと枕許に車坐になつて、何かひそ〳〵と語り合つてゐる聲が、遠い國の出來事のやうに聞えてゐた。

「おゝ、あなた。——」

最初におむらが、聲をかけた。が、菊之丞の心には、聲の主が誰であるのか、まだはつきり映ら

なかつたのであらう。きよろりと一度見廻したきり、再び眼を閉ぢてしまつた。

玄庵は徐かに手を振つた。

「どなたもお靜かに。――」

「はい。」

急に水を打つたやうな靜けさに還つた部屋の中には、たゞ香のかをりが、低く這つてゐるばかりだつた。

玄庵は、夜着の下へ手を入れて、かるく菊之丞の手首を掴んだまゝ、首をひねつた。

「先生、如何でございます。」

「脈に力が出たやうぢやが。……」

「それはまア、うれしうござんす。」

「だが、御安心は御無用ぢや。いつ何時變化があるか判らぬからのう。」

「はい。」

「お見舞の方々も、次の間へお引取りなすつてはどうぢやの。御病人は、出來るだけ安靜

に、休ませてあげるとよいと思ふでの。」

「はい〳〵」と羽左衛門が大きくうなづいた。「如何にも御もつともでございます。――では、こゝはおかみさんにお願ひ申して、次へ下つてゐることにいたしませう。」

「それがようござる。及ばずながら愚老が看護して居る以上、手落はいたさぬ考へぢや。」

「何分共にお願ひ申上げます。」

一同は、足音を忍ばせて、襖の開けたてにも氣を配りながら、次の間へ出て行つた。

暫し、鐵瓶のたぎる音のみが、部屋のしじまに明るく殘された。

「御内儀。」

玄庵の聲は、低く重かつた。

「はい。」

「お氣の毒でござるが、太夫はもはや、一時の命ぢや。」

「えッ。」

「いや靜かに。――たゞ今、脈に力が出たやうぢやと申上げたが、實は他の方々の手前を

かねたまでのこと。心臓は、微かに温みを保つて居るだけのことぢや。」

「それではもはや。……」

おむらの、今まで辛抱に辛抱を重ねてゐた眼からは、玉のやうな涙が、頬を傳つて溢れ落ちた。

やがて、香煙を揺がせて、恐る恐る襖の間から首を差出したのは、弟子の菊彌だつた。

「お客様でございます。」

「どなたが。」

「谷中のおせん様。」

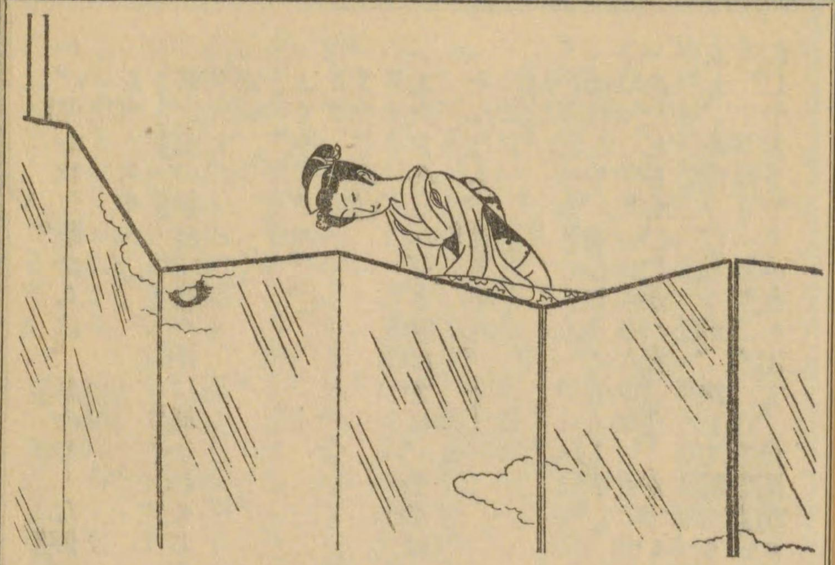
「えッ、あの笠森の。……」

「はい。」

「太夫は御病氣ゆゑ、お目にかゝれぬと、お斷りしておくれ。」

するとその刹那、ぱつと眼を開いた菊之丞の、細い聲が鋭く聞えた。

「いゝよ。いゝから、こゝへお通し。——」



夢六

初霜を避けて、昨夜縁に上げられた白菊であらう、下葉から次第に枯れてゆく花の周圍を、靜かに舞つてゐる一匹の虻を、猫の頬りに尾を振つてじやれる影が、障子にくつきり映つてゐた。

その虻の羽音を、聞くともなしに聞きながら、菊之丞の枕頭に座して、ぢつと寢顔に見入つてゐたのは、お七の着付もあでやかなおせんだつた。

紫の香煙が、ひともとすなほに立昇つて、南向きの座敷は、硝子張の中のやうに暖かい。

七年目で會つた、たつた二人の世界。——殆ど一夜のうちに生氣を失つてしまつた菊之丞の、な

かば開かれた眼からは、絲のやうな涙が一筋頰を傳はつて、枕を濡らしてゐた。

「おせんちやん。」

菊之丞の聲は、わづかに聞かれるくらゐ低かつた。

「あい。」

「よく來てくれた。」

「太夫さん。」

「太夫さんなんぞと呼ばずに、やつぱり昔の通り、吉ちやんと呼んでおくれな。」

「そんなら、吉ちやん。――」

「はい。」

「あたしや、會ひたうござんした。」

「あたしも會ひたかつた。――かういつたら、お前さんはさだめし、心にもないことをいふと、お想ひだらうが、決して嘘でもなけりや、お世辭でもない。――知つての通り、あたしやどうやら人氣も出て、世間樣からなんのかのと、いはれてゐるけれど、心はやつぱり、十年前もおなじこと。義理でもらつた女房より、浮氣でかこつた女より、心から思ふのはお前の身の上。暑いにつけ、寒いにつけ、切ない思ひは、いつも谷中の空に通つてはゐたが、今ではお前も人氣娘、うつかりあたしが訪ねたら、あらぬ浮名を立てられて、さぞ迷惑でもあらうかと、けふが日まで、辛抱して來ましたのさ。」

「勿體ない、太夫さん。――」

「いゝえ、勿體ないより、濟まないのはあたしの心。役者家業の憂さ辛さは、どれ程いやだとおもつても、御贔屓からのお迎へよ、お座敷よといはれゝば、三度に一度は出向いて行つて、笑顏のひとつも見せねばならず。そのたび毎に、あゝいやだ、こんな家業はけふ止そか、明日やめようかと思ふものゝ、さて未練は舞臺。このまゝ引いてしまつたなら、折角錬へたおのが藝を、根こそぎ棄てねばならぬ悲しさ。それゆゑ、秋の野に鳴く蟲にも劣る、はかない月日を過ごして來たが、――おせんちやん。それもこれも、今はもうきのふの夢と消えるばかり。所詮は會へないものと、あきらめてゐた矢先、ほんたうによく來てくれた。あたしやこのまゝ死んでも、思ひ殘すことはない。――」

「もし、吉ちやん。」

「おゝ。」

「しつかりしておくんなさい。羞かしながら、お前がなくてはこの世の中に、誰を思つて生きようやら。おまへ一人を、胸にひそめて來たあたし。あたしに死ねといふのなら、たつた今でも、身代りにもなりませう。——のう吉ちやん。たとへ一夜の枕は交さずとも、あたしやおまへの女房だぞえ。——これ、もうし吉ちやん。返事のないのは、不承知かえ。」

一膝づつ乘出したおせんは、頰がすれ〳〵になるまでに、菊之丞の顔を覗き込んだが、やがてその眼は、佛像のやうにすわつて行つた。

「吉ちやん。——太夫さん。——」

「お、せ、ん——」

「あゝ、もし。」

おせんは、次第に唇の褪せて行く菊之丞の顔の上に、涙と共に打ち伏してしまつた。

隣座敷から、俄に人々の立つ氣配がした。

夢七

二代目瀨川菊之丞の死が報ぜられたのは、その日の暮れ方近くだつた。江戸の民衆は、去年の吉原の大火よりも、更に大きな失望の淵に沈んだが、中にも手中の珠を奪はれたやうな、悲しみのどん底に落ち込んだのは、菊之丞でなければ夜も日もあけない各大名や旗本屋敷の女中達だつた。

殊に、この知らせを受けて、天地が覆へつた程の驚愕を覺えたのは、南町奉行本多信濃守の妹お蓮であらう。折から夕餉の膳に對はうとしてゐたお蓮は、突然手にした箸を取落すと、そのまゝ狂氣したやうに、ふら〳〵ッと立上つて、跣足の

ま丶庭先へと驅け降りて行つた。

二三人の侍女が、直ぐさまその後を追つた。

「もし、お嬢樣。お危なうございます。」

「何をするのぢや。放しや。」

「どちらへおいで遊ばします。」

「知れたことぢや。これから直ぐに、濱村屋の許へまゐる。」

「これはまア、滅相なことを仰しやいます。」

「何が滅相なことぢや、わらはがまゐつて、濱村屋の病氣を癒して取らせるのぢや。——邪魔だてせずと、そこ退きや。」

「なりませぬ。」

「えゝもう、退きやといふに、退かぬか。」

手荒く突き退けられた一人の侍女は、轉びながらも、お蓮の裾を確と押へた。

「お嬢樣。お氣をお靜め遊ばしまして。……」

「いらぬことぢや。放せ。」

「いゝえお放しいたしませぬ。今頃お出まし遊ばしましては、御身分に係はりまする。もしまた、たツてお出まし遊ばしますなら、一應わたくし共から御家老へ、その由お傳へいたしませねば。……」

「くどいわ。放せといふに、放さぬか。」

夢中で振り拂つたお蓮の片袖は、稻穗のやうに侍女の手に殘つて、惜し氣もなく土を蹴つてゆく白蠟の足が、夕暗の中にほのかに白かつた。

「もし、お嬢樣。——」

池を廻つて、築山の裾を走るお蓮の姿は、狐のやうに速かつた。

「それ、向ふから。——」

「あちらへお廻り遊ばしました。」

男氣のない奥庭に、次第に數を增した女中達は、お蓮の姿を見失つては一大事と思つたのであらう。老も若きもおしなべて、庭の木戸へと歩を亂した。

が、必死に驅け着けた庭の木戸には、もはやお蓮の姿は見られなかつた。

「お嬢樣。――」

「お待ち遊ばしませ。」

しかも、年に一度も、驅けたことなどのないお蓮は、庭木戸を出は出たものゝ、既に脚が釣るまでに疲れ果てゝ、口の中で菊之丞の名を呼びながら、今はもはや堪へられない歩みを、いづくへとのあてもなしに、無理から先へ先へと運んでゐた。

「――濱村屋、待ちや。わらはを置いて、そなたばかりがどこへ行く。――そりや聞えぬぞ。わらはも一緒ぢや。そなたの行きやるところなら、地獄の極へなりと、いとひはせぬ。連れて行きや。速う連れて行きや。」

二十一で坂部壹岐守へ嫁いで、八年目に戻つて來た、既に三十の身ではあつたが、十四五の頃から早くも本多小町と謳はれたお蓮は、まだ漸く二十四五にしか見えず、いづれかといへば妖艶なかたちの、情熱に燃えた眼を据ゑて、夕闇の中を音もなく歩いてゆく樣は、ぞッとする程凄かつた。

夢八

いづこの大名旗本の屋敷に、如何なる騒ぎが持上つてゐようとも、それらのこととは、まつたく別の世界の出來事のやうに、菊之丞の家は、靜かにしめやかだつた。

座元をはじめ、あらゆる芝居道の人達はいふまでもなく、贔負の人々、出入のたれかれと、百を越える人數は、仕切りなしに押し寄せて、さしも豪奢を誇る住居も所狹きまでの混雜を見せてゐたが、しかも菊之丞の冷たいむくろを安置した八疊の間には、妻女のおむらさへ入れないおせんがただ一人、首を垂れたまゝ、默然と膝の上を見詰め

てゐた。

ふと、おせんの固く結んだ唇から、低い、微かな聲が漏れた。

「吉ちやん。――おかみさんや、ほかの人達にお願ひして、あたしがたつた一人、お前の枕許へ殘してもらつたのは、十年前の、飯事遊びが、忘れられないからでござんす。――みんなして、近所の飛鳥山へ、お花見に出かけたあの時、いつもの通り、あたしとお前とは夫婦でござんした。幔幕を張りめぐらした、どこぞの御大家の中へ、迷ひ込んだあたし達は、それお前も覺えてであろ。繪にあるやうな綺麗な、お孃樣に何やかやと御馳走を頂戴した擧句、お化粧直しの幕の隅で、あたしはお前に、お前はあたしに、互にお化粧をしあつて、この子達、もう小十年も經つたなら、きつと惚れ〴〵するやうに美しくなるであらうと、お世辭にほめて頂いた、あの夢のやうな日のことが、いまだにはつきり眼に殘つて……吉ちやん。あたしや今こそお前に、精根をつくしたお化粧を、してあげたうござんす。――紅白粉は、家を出る時袱紗に包んで持つて來ました、あたしの遣ひふるしでござんすが、この紅筆は、お前が王子を越す時に、あたしにおくんなすつた、今では形身。役者衆

の、お前のお氣に入るやうには出來ますまいけれど、辛抱しておくんなさい。せめてもの、あたしの心づくしでござんす。――」

北を枕に、靜かに眼を閉ぢてゐる菊之丞の、女にもみまほしいまでに美しく澄んだ顏は、磁器の肌のやうに冷たかつた。

白粉刷毛を持つたおせんの手は、名匠が毛描きでもするやうに、その上を丹念になぞつて行つた。

眼、口、耳。――眞白に塗りつぶされたそれらのかたちが、間もなく濡手拭で、おもむろにふき清められると、やがて唇には眞紅のべにがさゝれて、菊之丞の顏は今にも物をいふかと怪しまれるまでに、生々と蘇つた。

おせんは、ぢツとその顏に見入つた。

「吉ちやん。――もし、吉ちやん。」

次第におせんの聲は、高かつた。呼べば答へるかと思はれる口許は、心なしか、寂しくふるへて見えた。

「――あたしや、これから先も、きつとおまへと一緒に、生きて行くでござんせう。おまへもどうぞ、魂だけはいつまでも、あたしの傍にゐておくんなさい。あたしや千人萬人の人からいひ寄られても、死ぬまで動きはいたしませぬ。――もし、吉ちやん。……」

ぽたりと落ちたおせんの涙は、菊之丞の頰をぬらした。

「これはまア、折角お化粧したお顔へ。……」

おせんはもう一度、白粉刷毛を手に把つた。と、次の間から聞えて來たのは、妻女のおむらの聲だつた。

「おせんさん。」

「は、はい。――」

「お燒香のお客樣がお見えでござんす。よろしかつたら、お通し申します。」

「はい、どうぞ。――」

あわてゝ枕許から引き下つたおせんの眼に、夜叉の如くに映つたのは、本多信濃守の妹お蓮の、剝げるばかりに厚化粧をした姿だつた。

（完）

邦枝完二著作集表

毒婦暦 短篇讀物集 大正五年五月版 日東堂
――定價一圓五十錢（絶版）
內容 阿蘭陀お蝶。鳥追お松。玉蟲お蘭。自轉車お玉。高橋於傳。その他

邪劇集 戲曲第一集 大正八年十二月版 歌舞伎新報社
――定價一圓七十錢（絶版）
內容 萩原一座。カナリヤ。金床の小春日。秋の競馬。柳ちる日。平河馬車製作所。みぞれ笹。地獄へ落ちた寫樂。

異教徒の兄弟 戲曲第二集 大正十一年五月版 文泉堂
――定價二圓七十錢（絶版）
內容 島屋飛脚店。明暗錄。篠原一座。或る騎手の話。平河馬車製作所。異教徒の兄弟。

劇壇獨歩錄 演劇評論集 大正十三年二月版 小西書店
――定價一圓五十錢（絶版）

立春大吉 戲曲第三集 大正十四年四月版 聚芳閣
――定價二圓（絶版）
內容 立春大吉。通俗震災記。落花無情。塀外の一場面。古番附。居留地附近。

雨中双景 中篇小說集 大正十五年五月版 聚芳閣
――定價一圓七十錢（絶版）
內容 雨中双景。師走空。菖蒲河岸。蠟燭屋三朝。

青春 戲曲第四集 大正十五年四月版 寶文館
――定價一圓二十錢
內容 青春。破れた洋傘。盜賊戲談。戰國時代史抄。面屋鶴八の死。役者氣質。

松助藝談　尾上松助隨談集　昭和三年九月版　大森書房
（舞臺八十年）
——定價二圓五十錢（絕版）

戲曲の見方と考へ方　戲曲作法　昭和三年二月版　考へ方研究社
——定價　二　圓

東州齋寫樂　中篇小說集　昭和四年二月版　博文館
——定價一圓八十錢

內容　東州齋寫樂。師走空。反逆者光秀。雨中双景。菖蒲河岸。

大空に描く　長篇現代小說　昭和四年三月版　博文館
——定價　二　圓

接吻市場　長篇現代小說　昭和五年九月版　三省堂
——定價一圓七十錢

歌麿をめぐる女達　長篇時代小說　昭和六年十二月版　新潮社
——定價一圓八十錢

接吻市場　日本小說文庫(145/146)　昭和七年六月版　春陽堂
——定價各三十五錢

歌麿をめぐる女達　日本小說文庫(199)　昭和七年十一月版　春陽堂
——定價　四十錢

江戸役者　長篇時代小說　昭和九年一月版　春秋社
——定價

おせん　中篇時代小說　昭和九年一月版　新小說社
——定價一圓八十錢

昭和九年一月二十日印刷
昭和九年一月二十五日發行

おせん

著作權之章

定價金壹圓八拾錢

著作者　邦枝完二　東京市品川區北品川三丁目二百十五番地
發行者　島源四郎　東京市本所區厩橋一丁目二十七ノ二
印刷者　小川三郎　東京市本所區厩橋一丁目二十七ノ二
印刷所　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十四番地　新小說社　振替東京五七三二番　電話神田三四〇一番

段七しぐれ

長谷川伸作
小村雪代山裝釘

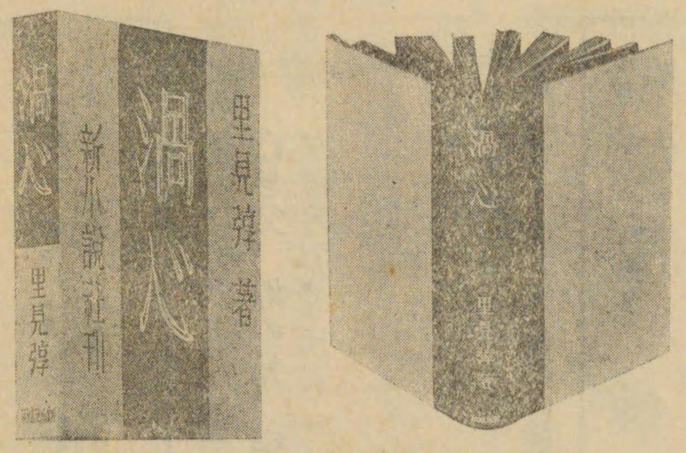
芝居に、映畫に、「段七しぐれ」の眞價は益々高い、作者自から粒撰りの作と稱す。これこそ眞に作者が讀者に對し、最も素晴しい贈物と云はねばならぬ。

・内容・

段七しぐれ
四人旅前後
こども旅
小白府越え
南北旅の鳥
彼是命の戀

四六判・二百八十頁
九ポイントルビ付二段組
表紙・鳥の子紙
扉・細川紙
箱張・紅唐紙
木版摺・極美本
定價壹圓五拾錢
送料拾貳錢

東京市神田區錦町一丁目十四番地
新小說社
電話神田三四〇一番
振替東京五七二三番



裝釘・恩地孝四郎畫伯

里見弴著

■渦心■

・内容・
渦心
一家風
都邑祕帖

定價金貳圓參拾錢
送料十四錢
背革金箔押豪華版

まごゝろ作家として其名高き作者の近作集である。久し振りに見る美本と、珠玉の名作を贈る小社は幸である。

東京市神田區錦町一丁目十四番地
新小說社
電話神田三四〇一番
振替東京五七二三番

大衆詩集

白夜低唱

長谷川伸作
小村雪岱裝釘

◇内容◇
煩惱裸像、思母、初春賦、白夜低唱、戀情菩提、
亡き父、幻の兄、唄香華、濱港徘徊、京洛吟杖、
古驛遊情、

四六判・四十丁・和綴本・
全部和紙で出來た澁い本です
定價金壹圓貳拾錢・送料六錢

作者の私刊で、特に許されて、限定本四百冊の内百冊を皆様にお頒ちする事になりました。僅少の冊數ですからお早くお求め下さい。

近刊豫告

隨筆集

長谷川伸著

東京市神田區錦町一丁目十四番地
新小說社
電話神田三四〇一番
振替東京五七三二番

鼠小僧唄祭

長谷川伸著
田中咄哉州裝釘

「鼠小僧唄祭」當代隨一の大衆文學作家を持つて鳴る氏の長篇最大傑作である。讀賣新聞に掲載されたものを更に隨所に加筆完璧を期せる名作は正に昭和年代を飾る一大雄篇である。再讀三讀而して作者の心情を汲まれん事を希ふ。發行數日にして數千部を賣盡す名作品!!

近刊

隨筆集

長谷川伸著

定價金一圓八十錢
送料十二錢
木版彩色極美本

東京市神田區錦町一丁目十四番地
新小說社
電話神田三四〇一番
振替東京五七三二番

近刊する二大名著

久保田万太郎著　山下新太郎裝釘

●月明り・街　中●

「月明り」は週間朝日「街中」は都新聞に連載され共に好評を得たる名作で本書にする爲め著者は改めて筆を下されたものである。作者の藝術良心は一字一句も見逃す事なく其作品を磨いて益々下町文學の眞髄を極めて居る。

里見弴著（短篇小説第十集）

●次代恐怖症●

内容　次代恐怖症、夏草、或る別れ話、怠屈夫人、舵、或る種の女、浮世ばなし、求心力、どろぼう、馬鹿、

近時益々筆の冴えを見せて次々に發表された小説集であるがこれ程吾人の心を打つ作品は近年稀れに見る快著である。

東京神田區錦町一丁目十四番地　新小説社　振替東京五七三二番　電話神田三四〇一番

656
66

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black